

罪業妄想患者の強迫的清掃行為に行動変化を起こさせた看護介入の分析

キーワード：強迫的清掃行為・罪業妄想・行動変化・看護介入

2病棟3階

吉松宏剛 藤井晴枝 西本淑子 土田奉美 江本しず子

I はじめに

近年うつ病は速効性のある SSRI（選択的セロトニン再取り込み阻害薬）等の新しい抗うつ薬による薬物療法が主体であるが、治療には数週間から数ヶ月を要し、その間心身の疲労状態にある患者は休養をとることが重要である。本事例の患者は罪業妄想に左右された強迫的清掃行為（以下:強迫行為とする）により休養がとれず、看護師が介入に苦慮していた。しかし一人の看護師の一言が患者の行動を変化させ、強迫行為を修正することが出来た。これに関連する文献は少なく、看護師の一言がなぜ患者の行動を変化させたのか、看護介入の有効性を明らかにする為、ペプロウの患者－看護師関係論に基づき振り返りをしたのでここに報告する。

II 方法

- 1) 対象：50代 女性 主婦 病名：妄想性うつ病
病前性格：社交的・真面目
入院期間：X年3月～(52日間)
- 2) 現病歴：数週間の不眠が続き罪業妄想が出現し家族に敬語で話した。謝罪のつもりで近所のゴミ拾いドブの掃除を一日中行うようになり、家庭に適応できない状態になった。
- 3) データの収集：看護記録、医師診療録、介入した看護師から情報を収集。
- 4) 分析方法：患者の言動の変化と看護師の介入をペプロウの患者－看護師関係論に基づき4期に分類し分析した。
- 5) 倫理的配慮：病状が安定した時期に患者及び夫へ研究の主旨を口頭で説明し、データの内容は個人が特定できないよう処理し研究以外には使用しないことを説明し了承を得た。

III 看護の実際・考察

【第1期】(入院後～30日目・方向付けの局面)

罪業妄想は確信的な状況で、日増しに清掃場所は拡大し一日中清掃行為が続き疲労困憊した時期。患者は「人の悪口を言ってしまった、反省のつもりで」と訴え、入院後も病棟内の清掃行為が見られた。看護師は休養の場を提供できるよう介入を行ったが入院5日目頃より強迫行為に発展していった。そこで医師と共に合同カンファレンスを開き、患者の情報交換を行った。医師より患者の強迫行為は治療上逆効果であり、そのまま放置するとエスカレートする傾向にもある為、薬物効果が表れるまでの期間は清掃以外の健康的な部分に視点が向くよう介入の依頼があった。そこで看護師は休養できる環境を提供し、患者との関係を構築できるように、「本当はしたくないのにしないと不安なの」という患者の強迫観念による不安感や妄想に左右されて強迫行為をせずにはいられない患者の精神的負担には受容的に介入し、休養の必要性を繰り返し説明した。家族

へも同様にその必要性を説明し協力を依頼した。その後も日増しに強迫行為が増強し男子トイレや高所での危険な清掃行為に他患者から苦情も出始めた。その際にはその旨を伝え中断するよう介入すると、一時的ではあるが応じることが出来た。しかし表情は硬く強迫観念に囚われた患者の不安は伺え、清掃行為の頻度、時間は更に増強し一日中清掃行為が続き疲労困憊していった。

ペプロウは患者も看護師も互いに未知の人として対峙した後に方向付けられるには、双方が「切実なニード」を実感し、看護師が有効な専門的役割を担いながら患者理解しなければならないと言っている。患者の強迫行為に対して看護師は、制止・休養を促していく専門看護師としての役割、そして患者の強迫観念による不安・負担に対しては無条件的な母親役割を担う、反響的役割を果たすことで、患者は「しないと不安」という自分に気付いた。この時期が方向付けの局面と考える。

【第2期】(31日目～35日目・同一化の局面)

第1期の介入により制止をする看護師に強い拒否はなく関係の悪化は見られなかったが、強迫行為を看護師に隠れて行うようになった時期。「悪口を言ってしまったから、少しでも償いになれば・・・私は大丈夫ですから」という清掃行為をせずにはいられない患者の精神的負担には引き続き受容的に介入した。そこで看護師は強迫観念に左右された言動の変化を観察しながら一時的な中断を休憩として取り入れる提案を行った。この頃より薬剤効果も徐々に見られだし、妄想に左右された強迫観念は残存しながらも「少し休憩してもいいですか?」と、看護師に確認をとり、強迫行為の合間にテレビや読書が可能になった。疲労が蓄積しても止めることが出来なかった強迫行為を自ら中断できるようになった。看護師に隠れて行う場面も何度かあったが、制止をする看護師に対して強い拒否はなく、「見つかってしまう」と温和に反応し、専門職としての看護師の意見として受け入れられるようになった。

ペプロウは、看護師から提供されるケアを通じて伝わる母親のような優しさは患者の自由な感情表出を可能にし、自分自身を見極めさせると言っている。その過程で患者は自分の安寧や価値を脅かす恐怖感を和らげてくれる人物を看護師の中から選び同一化することで意思表示を行い、自分で強迫行為を<やらないといられない>という意識から<やっておくと安心>という意識に変化させた。この時期が同一化の局面と考える。

【第3期】(36日目～40日目・開拓利用の局面)

「看護師さんの一言でスーっと楽になれた」と、一人の看護師の“もうせんでいいんよ”の一言が患者に影響を与え清掃行為が激減し妄想に囚われず過ごせた時期。強迫行為は続きながらも患者は「声かけて止めさせてもらった方が安心です」と訴え、罪業妄想に囚われた発言の中に掃除を止めたいという意思が表出されだした。他の看護師も同様に無理に強迫行為をせずに過ごせるよう介入をし、強迫行為は続いていたが、一人の看護師の一言で「すぐくスツとして楽になれたんよ、今日は休みたいから何もせんけどそれでいい?」と看護師に許可を取りに来た。それ以降清掃行為を行う姿がほとんど見られなくなり、夜間も熟睡できた。患者からも「休養が出来た」と実感する発言が見られた。

ペプロウはこの時期における患者の行動は、利用するものを有効にする為に分にとって価値あるものを自分の見解に従って引き出す行動をとると言っている。患者は、依存要求に応える母親役割を担ってきた看護師を自分の意思で選択し、自分の問題解決を試みようとした。強迫観念から脱しつつある状況において看護師を有効に利用することができ、自分の見解で強迫行為を激

減することができた。依存欲求にある状況から独立しようとする意思表示が見られた時の患者の変化を見逃さずに介入することが重要であり、専門職として患者にタイミングよく利用された時期が、開拓利用の局面と考える。

【第4期】(41日目～退院・問題解決の局面)

強迫行為もほとんど見られなくなり、気分転換や自宅での生活の工夫を看護師と共に考えた時期。健康的な生活を自己決定できるよう支援することで、患者は「早く退院したい」と話すようになった。病棟内でも小作業をする姿や他患者との交流もしばしば見られるようになり、生活や対人環境の拡大に向け、積極性が見られた。その後開放病棟へ転棟となり、生活環境が拡大し、試験外泊を取り入れ自宅への適応を図った。自宅でも夫、患者の評価も良く家族内での適応も図れ、退院となる。

ペプロウの言うこの局面は患者の持つ健康問題が解決された時期であり、自己決定できるよう介入を図ったことで、患者自身が問題解決者として十分に独立し、大人としてふるまうことが出来た。さらに健康的な生活に近い入院生活を、患者自身が自己決定したという実感と自信に繋がったこの時期が、問題解決の局面と考える。

IV 結論

今回罪業妄想による強迫行為に対し、患者の行動に変化を起こさせた看護介入をペプロウの患者－看護師関係の理論に基き振り返り学んだ事は以下である。

- 1) スタッフ間で情報を共有し、不健康な面に介入していく専門看護師、疾患に関する患者の不安に介入していく母親の代役としての役割を果たす。
- 2) 強迫観念に囚われ、強迫行為を続ける患者の不安を無条件に受け止める。
- 3) 患者が選択した母親役割を担う看護師が、専門職としての無条件な母親役割としての任務を全うする。
- 4) 患者が健康的な生活を自己決定しようとする時、その変化を見逃さずに介入することが家庭復帰への自信と自己決定能力の向上に繋がると考える。

参考・引用文献

1. 金子道子：ヘンダーソン，ロイ，オレム，ペプロウの看護論と看護過程の展開，小学館，P253～300，1999
2. 池田明子・他（訳）：ペプロウ看護論 看護実践における対人関係理論，医学書院，1996

入院日数	5日目	15日目	25日目	30日目	35日目	40日目	52日
患者の発言	本当はしたくないのにしないと不安なの		掃除するのに高い所が届かないからイスを貸して	少し休憩していいですか？	すごくスツとして楽になれたんよ、今日は休みたいから何もせんけどそれでいい？		あの時はいろいろ迷惑かけたねゆっくりするのもいいね。早く退院したい
患者の行動	強迫的な掃除に他患者から苦情がある	掃除をせすにはいられない	洗面台に上がって掃除をしている	テレビ視聴や読書、小作業に集中できる。	掃除をやっておくと安心		表情明るく他患者との交流も積極的
清掃状況	食事・睡眠以外はほとんど掃除をしている	身体への負担も強く制止の声掛けに一時中断	危険な場所でもかまわず掃除をする	掃除は続いているが他の作業へも目が向きだす		清掃行為激減！	
看護師の関わり	休養の場として入院生活を送るよう指導	カンファレンス施行。現状の把握、苦情が出た際には注意を促す	一時的にも掃除を中断することは出来た	危険行為には制止を促す。受容的に介入した上で休憩を取り入れるなど提案し受け入れられた。		『もう掃除せんていんよ』の一言が患者に影響。	気分転換活動の工夫、開放病棟へ転棟し試験外泊を行う
内服	バキシル（10）内服開始	バキシル（20）増量	入院14日目バキシル（40）増量			4月25日不眠にてジプレキサ開始	
局面	第一期：方向付けの局面			第二期 同一化の局面	第三期 開拓利用の局面	第四期 問題解決の局面	